

シリーズ：進化し続ける産総研のコーディネーション活動(第44回) チームイノベーション

上席イノベーションコーディネータ こんどう みちお
近藤 道雄

イノベーションとスピード感

2013年4月に上席イノベーションコーディネータに着任しました。それまでは研究ユニット長として9年間太陽光発電に関わってきました。その中で産学連携について経験したことをご紹介し、皆様のお役に立てれば幸いです。



イノベーションという言葉は科学技術基本計画の中でも“科学的発見や技術的発明を洞察力と融合し発展させ、新たな社会的価値や経済的価値を生み出す革新”と定義されています。生み出された技術や知見が社会実装されるまでには色々な人の合意と協力が必要ですので、本来時間がかかります。しかし、最近の実例を見るとその発明から応用、社会実装までの期間はこれまでより圧倒的に短くなっています。太陽光発電について言えば、この10年で世界の太陽電池生産量は30倍の年産3,000万キロワット、世界の総導入量が1億キロワットにまで急成長しました。今のイノベーションにはスピード感が求められるのだと思います。

その一方、グローバルなコスト競争の中で日本の企業は国際競争力を失いつつあります。これには、日本特有の同一業種に多くのメーカーが存在して競争力が分散しているという事情による弊害もあるように思います。

産総研の役割

産総研の目指す究極のゴールは、国民社会、ひいては地球上のすべての人の暮らしを豊かにするイノベーションを実現することだと考えます。太陽電池を例に取れば、発電性能

や品質を中立的に評価するための知的基盤の確立や、その国際標準化などにより、消費者、受け手の利益が守られることとなります。一方、複数の太陽電池メーカー同士の共通課題の解決や、部材メーカーとの異業種交流による新素材、部材開発の促進などハブ機能を果たすためのコンソーシアム研究は作り手の競争力強化に資することとなります。これらの活動の中で共通して痛感させられたのは合意形成の難しさでした。

チームイノベーション

イノベーションは社会全体を変えていく行為ですから、多くの人の協力、チームワークが必要です。スピード感も必須です。日本の同業多社という環境の中で本来差別化することを目的としている企業間の合意を取って連携するという事は簡単ではありません。標準化においても関係者の合意を得るという意味で同様です。そのためには強い信念、信頼関係、そして粘り強い交渉が必要だと思います。信念のない言葉は説得力をもちません。

産総研が組織としてイノベーションの要になるためには、時間をかけて信頼関係を国民および企業の皆様と築いていくことが必要です。その信頼関係のなかで、お互いの本音で交流することが可能になり、イノベーションを生み出す原動力が生まれるのだと考えます。

このような連携は産総研を核とするチームイノベーションと言えるでしょう。イノベーション推進本部はチームイノベーションの応援団だと考えます。私自身、その一員として皆様と力を合わせて微力を尽くしたいと考えます。どうぞよろしくお願いいたします。